

# 宝の海から

白浜で出会った生きものの宝

46

京都大学助教授 久保田 信 (京都大学 瀬戸臨海実験所)

タンゴムシに近い仲間、物門のユズタマカイメンの無性芽(むせいが)がいくつも入っていた。だも捕れた。



きら光る剛毛を体節ごとにもったゴカイ類の幼生もいた。

△ケンミジンコの一種の体表に寄生していたカニヤドリムシ類の幼生

体つきをしている。推進には内臓が収納されている力は腹部後縁にある筋肉。親はあちこちで見た形の構造物で、そのほぼことがあり、北浜にもい全周に生えている繊毛を動かして滑るよう移動し、私の研究人生で初めて遭遇できたことにな一見すると豚の鼻のよう

◇ プランクトンという穴のように見えるのは一対の眼点である。体の先端に透明な吻のように突き出た部分があり、ピンと張られたセンサーの顕微鏡的サイズなのだ。が、実は世界最長の動物まで知られている。それは管クラゲ類の一種で、体長40センチもあるからすさまじい。ソナーでやると長さがわかったという。シロナガスクジラも頭負けるのである。体重の方でもすこぶる重いものもいる。漁獲物に混入して網が引き上げられず、やっかいものとなっている外来性のエチゼンクラゲでは、1個体が大人1人の体重をゆうに超える。

最後に、生活史の研究を基礎に判明した神秘のベニクラゲの一生、とりわけ若返り・不老不死なる特徴を強調した解説をした。生物の一生と生物同士のからみあいを常に意識しておくことの基礎と重要性を理解してもらった。

なお、ラッキーだったのは、連載の45回で紹介した漂着したコマッコウ属のクジラを、番所崎の先端の浜までいっしょに観察に行けたことだった。あちこちの角度からこの珍しいクジラを学生たちは観察しながら、最近たいへん便利になった携帯電話で写真を撮影して記念にしていた。

## 京大生の臨海 実習始まる

京都大学部生を対象とした夏季臨海実習の第1回は台風16号の影響で大変だった。

モンスターという、とう脚類の一種の成体も捕れた。これには口や消化管が退化しており、生

ゴカイ類の幼生に類似した不思議な幼生も学生が見つけた。体長、体幅とも0.5センチほどで、ホ

ゴカイ類の分類が専門である加藤哲哉博士によれば、この変わった幼生はゴカイ類ではないの

# プランクトン観察

大変珍しい幼生も学生が見つけた。ケンミジンコの一種の硬い体表に付着して寄生生活を送る甲殻類だ。体形はべちゃん

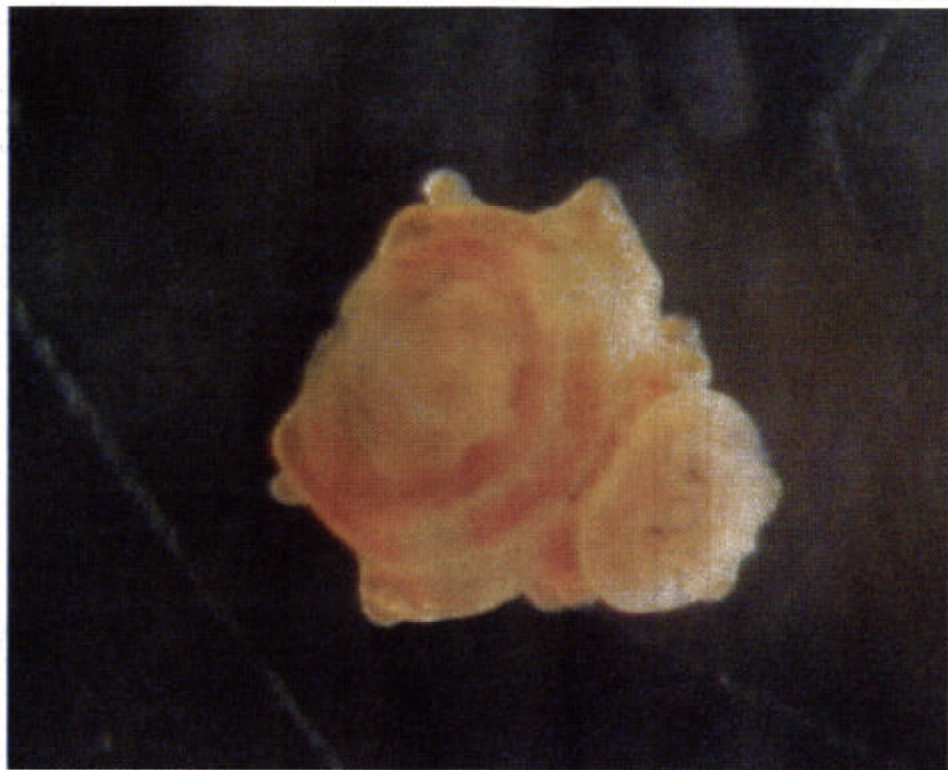
ゴカイ類の幼生に類似した不思議な幼生も学生が見つけた。体長、体幅とも0.5センチほどで、ホ

最後に、生活史の研究を基礎に判明した神秘のベニクラゲの一生、とりわけ若返り・不老不死なる特徴を強調した解説をした。生物の一生と生物同士のからみあいを常に意識しておくことの基礎と重要性を理解してもらった。

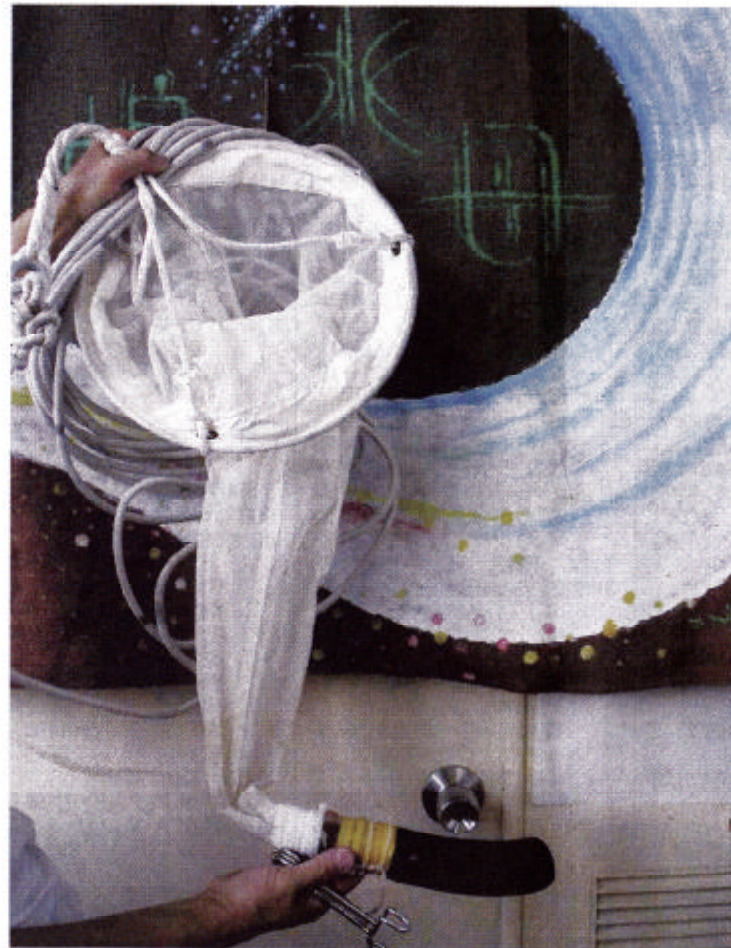
今回、見つかった主なものを挙げてみる。カニ類の幼生(ソエアやメガロバ)、フジツボ類の幼生(ノープリウス)。親のフジツボの脱皮殻も相当数捕れていた。エビ類の幼生もいた。以上のような節足動物門甲殻類の一時プランクトン以外に終生プランクトンとして

大変珍しい幼生も学生が見つけた。ケンミジンコの一種の硬い体表に付着して寄生生活を送る甲殻類だ。体形はべちゃん(せきぎん)動物門では、こで宿主が泳ぐ時に邪魔にならないように進化している。脚のつま先が宿

ゴカイ類の幼生に類似した不思議な幼生も学生が見つけた。体長、体幅とも0.5センチほどで、ホ



曲虫動物と思われる幼生の腹面図(加藤哲哉氏撮影)



お手軽なプランクトンネット。底に、大型のクラゲでも傷まないように工夫をほどこしている

お手軽なプランクトンネット。底に、大型のクラゲでも傷まないように工夫をほどこしている